

# 病害虫発生予察情報（5月予報）

令和4年4月26日  
静岡県病害虫防除所長

## 1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：やや少 ヒメトビウンカ発生量：やや少	昨年8月発生量 縞葉枯病：少（－） ヒメトビウンカ：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－）
	スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	発生面積率：多	昨年6月発生面積率：やや多（＋） 気象予報：気温：高い（＋）
小麦	赤かび病	発生量：多	4月中旬発生量：並（発生なし）（±） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋）
ばれいしょ	疫病	発生量：並 (発病株率 10.7%)	4月下旬発生量：少（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋）
	ジャガイモガ	発生量：少 (寄生株率 0.47%)	4月下旬発生量：少（発生なし）（－） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－）
	アブラムシ類	発生量：多 (寄生株率 24.1%)	4月下旬発生量：多（＋） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（－）
温州みかん	かいよう病	発生量：やや多 (発病度 0.05)	4月中旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：多い（＋）
中晩柑類	かいよう病	発生量：やや多 (発病度 0.05)	4月中旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（±） 降水量：多い（＋）
うめ・もも・ びわ・なし	果樹カメムシ類	発生量：並 (ただし中部地域は、やや多)	越冬虫数：並（±）
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：やや多	4月中旬発生量：並（±） 気象予報：気温：高い（＋） 降水量：多い（＋）

作物名	病害虫名	予報 (5月の県平均平年値)	予報の根拠
茶	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.4 頭/1.25 m <sup>2</sup> ) 発生時期：やや早い	4月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：多 (寄生虫数 0.1 頭/1.25 m <sup>2</sup> ) 発生時期：やや早い	4月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(±)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (叩き落とし虫数 5.8 頭/4 か所)	4月中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(－)
	チャノミドリ ヒメヨコバイ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 1.6 頭/4 か所)	4月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(－)
	カンザワハダニ	発生量：やや多 (摘採面寄生葉率 2.8%)	4月中旬発生量：やや多(+) 天敵(カブリダニ類)発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(－)
	クワシロ カイガラムシ	発生量：多 発生時期：やや早い (5月未調査)	4月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：多い(－)

#### 表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県の過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(－)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報  
はこちら  
で検索!



静岡県農薬安全使用指針  
・農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

## 2 予報の根拠と防除対策

### 【稲】

#### ●縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

##### 予報の根拠

- ・昨年8月の巡回調査では、縞葉枯病の平均発病株率は0.08%（平年0.58%）と平年より少なかった。
- ・昨年8月の媒介虫ヒメトビウンカの最多寄生虫数の平均は0.69頭/株（平年1.06頭/株）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いものの、気温は平年より高いため、媒介虫ヒメトビウンカの発生をやや助長する。このため、本病の発生もやや助長される。

##### 防除対策

- ・発生地域の発生時期に当たる作付では、縞葉枯病抵抗性品種（あいちのかおり SBL）を利用する。
- ・発生地域ではヒメトビウンカ対策として必ず箱処理剤を施用する。

#### ●スクミリンゴガイ（ジャンボタニシ）

##### 予報の根拠

- ・県内全域で分布が拡大している。
- ・1～2月は気温が平年より低かったため、越冬貝は少ない可能性があるものの、1か月予報では、気温は平年より高いため、本貝の発生を助長する。

##### 防除対策

- ・移植後の苗を食害するため、普通期栽培水田では、移植後の薬剤処理を実施する。また、移植後2～3週間は、食害を抑制するために浅水管理（4 cm 以下）に努める。周辺水路内に泥が残っていると、その中でも越冬している可能性があるため、水路から泥を上げて貝を破砕する。
- ・スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が寄生している可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

### <その他の病害虫>

#### ●苗立枯病、いもち病(苗いもち)、ばか苗病、もみ枯細菌病、イネシンガレセンチュウ

種子消毒（作業を省かず、以下の点に留意して行う。）

- ・自家採種の種もみは塩水選を必ず行う。
- ・「農薬安全使用指針・農作物病害虫防除基準（ホームページ<https://www.s-boujo.jp/>）」に掲載の種子消毒法の手順を守り実施する。
- ・厚播きは発病を助長するため、適正な種子量を守る。

## 育苗管理

- ・ 出芽期は30℃以上、緑化期以降は25℃以上の高温とならないよう、できるだけ温度管理に注意する。
- ・ 本県では MBI-D 剤耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県では QoI 剤耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念される。耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準（ホームページ <https://www.s-boujo.jp/>）」の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

## ●イネミズゾウムシ

- ・ 昨年6月の巡回調査では、イネミズゾウムシによる被害株率は20.5%（平年10.0%）と平年より多かった。常発地では箱処理剤を施用する。

## ●イネドロオウムシ

- ・ 主に東部高冷地で発生がみられる。昨年6～7月の東部高冷地における被害株率は、6月：0.4%（平年7.6%）、7月：6.8%（平年7.5%）と平年並～少なかったが、常発地では箱処理剤を施用する。

## 【小麦】

### <生育の概況>

生育は平年より3日程度早い。

## ●赤かび病

### 予報の根拠

- ・ 4月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった（平年発病穂率0.04%）。
- ・ 1か月予報では、気温が平年より高く、降水量も平年より多いため、多発が懸念される（赤かび病は出穂期以降の日平均気温が18℃～20℃、多湿条件下で発生が助長される）。

### 防除対策

- ・ 開花期～乳熟期にかけて感染する。防除適期は開花期頃である。コムギの生育状況をよく確認し、適期と考えられる時期に防除を実施する。
- ・ 降雨によって多発することがあるため注意する。
- ・ 日平均気温が18℃～20℃で降雨が続く場合には、追加防除を行う。

### <その他の病虫害>

## ●うどんこ病・赤さび病

- ・ 4月中旬の巡回調査では、うどんこ病の発病株率は16.6%（平年11.0%）、赤さび病は発生が認められなかった（平年1.9%）。
- ・ 発生を確認したら速やかに薬剤防除を実施する。
- ・ 静岡県奨励品種である「きぬあかり」はうどんこ病に弱く、また「イワイノダイチ」、「農林61号」より赤さび病も発生しやすい。止葉の一枚下葉の展開期以降～止葉抽出期に両病害の防除、さらに開花期に赤かび病との同時防除を行う。

## ●ハモグリバエ類

- ・4月中旬の巡回調査では寄生株率11.0%（平年6.4%）と平年より多かった。
- ・ほ場内の発生に注意し、多発した場合は薬剤により防除する。

## 【ばれいしょ】

### <生育の概況>

トンネルは前年と同程度、透明、黒マルチは前年よりやや遅いが、両者とも平年より早く生育している。露地は前年、平年よりともに早く生育している。

## ●疫病

### 予報の根拠

- ・4月下旬の巡回調査では平均発病率0.4%（平年2.2%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より多いため、発生を助長する。

### 防除対策

- ・本病は10℃を超えると活動が始まり、18～20℃が最適温度となる。開花期以降に気温が15℃以上、かつ降雨により湿度が高い状態が継続すると発病しやすくなる。
- ・発病に好適な気温下で降雨が続くと本病は急速にまん延する。多発生すると防除は困難になるので、開花期前からの予防散布を行い、発生初期のうちに防除すること。

## ●ジャガイモガ

### 予報の根拠

- ・4月下旬の巡回調査では、寄生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・1か月予報では、気温は平年より高いが、降水量は平年より多いため、発生を助長しない。

### 防除対策

- ・葉での被害は少なく目立たないが、塊茎での被害を回避するため、開花期以降に防除する。

## ●アブラムシ類

### 予報の根拠

- ・4月下旬の巡回調査では、寄生株率は18.9%（平年13.8%）と平年よりも多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・5月は気温の上昇とともに発生や密度の増加が予想されるので、発生に注意し密度の低いうちに防除を行う。なお、ほ場周辺の雑草はアブラムシ類の発生源となるので、除草を行う。

## 【温州みかん】

### ＜生育の概況＞

発芽期は、静岡市清水区で3月30日となり、平年よりやや早かった。開花始期は、平年より3日早くなると予想される。

### ●かいよう病

#### 予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、発病度は0.25（平年値0.19）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、発生を助長する。

#### 防除対策

- ・昨年または現時点で本病の発生が確認されているほ場では、中晩柑類に準じた防除を行う。ただし、新芽は薬害が出やすいので注意すること。また、銅剤を使用する場合、中晩柑類に比べて果実に対しても薬害が出やすいため注意する。

## 【中晩柑類】

### ●かいよう病

#### 予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、発病度は1.04（平年値0.86）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、発生を助長する。

#### 防除対策

- ・防風垣、防風網の整備等を行い、防風対策に努める。
- ・中晩柑類では、5月上旬及び下旬、6月下旬（梅雨期）に薬剤散布を行う。ただし、新芽に薬害が出やすいので注意する。

## 【うめ、もも、びわ、なし】

### ●カメムシ類（チャバネアオカメムシ）

#### 予報の根拠

- ・今年1月における越冬量調査では、チャバネアオカメムシ越冬虫数が1.0頭/㎡（平年1.1頭/㎡）と平年並であり、春期の発生量は県全体として平年並と考えられる。ただし、中部地域の越冬虫数は1.8頭/㎡（平年0.9頭/㎡）と平年よりやや多いため、春期の発生に注意する。
- ・フェロモントラップ及び予察灯（いずれも磐田市富丘）へのカメムシ類の誘殺が例年よりやや早いため、今後の発生に注意する。

#### 防除対策

- ・地域やほ場によって発生状況が異なる場合があるため、ほ場における発生をよく観察し、早期発見・防除に努める。

## 【かき】

### <その他の病害虫>

#### ●チャノキイロアザミウマ

- ・アメダスデータを用いたシミュレーションによると、多くのかき産地では、本種第1世代成虫の発生時期は5月10～21日（産地により時期が異なる）と予想される。
- ・防除は、病害虫防除所ホームページに掲載している「チャノキイロアザミウマ発生時期予測」を参考にして実施する。

## 【キウイフルーツ】

#### ●かいよう病

##### 予報の根拠

- ・4月の巡回調査では、平均発病葉率は2.4%（過去6年間の平均発病葉率2.7%）で平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は多いため、発生を助長する。

##### 防除対策

- ・病原菌の生育適温は10℃～20℃であり、罹病樹から漏出した樹液が風雨により飛散することで気孔や傷口から感染する。
- ・細菌病であり、樹体内に病原が侵入すると根本的な治癒は困難であるため、防除は予防が中心となる。
- ・受粉結実後～果実肥大期までに予防的に防除を実施する。なお、花芽伸長開始後は、使用する薬剤によっては薬害を生ずるので、コサイド3000を使用する。散布にあたっては、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・管理作業時に付着した罹病樹の樹液により感染が拡大するため、せん定器具はこまめに消毒する。

## 【茶】

### <生育の概況>

新芽の生育は平年よりやや早く、4月中旬の巡回調査時には一部地域で摘採が始まっていた。

#### ●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

##### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、チャハマキ越冬幼虫は0.02頭/1.25㎡（平年0.05頭/1.25㎡）と平年より少なく、一方チャノコカクモンハマキ越冬幼虫数は0.70頭/1.25㎡（平年0.04頭/1.25㎡）と、平年より多かった。
- ・各地域の予察灯及びフェロモントラップによる越冬成虫の発生状況は、発生時期は両種ともに平年並～やや早く、気温が平年より高く推移していることから、今後の幼虫の発生も平年より早くなると考えられる。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、両種幼虫の発生はやや助長される。

## 防除対策

- ・防除適期は、地域の予察灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を参考にして防除時期を決定する。また病害虫防除所のホームページでは県内各地の成虫誘殺状況を掲載しているので参考にする。

## ●チャノキイロアザミウマ

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.2頭/4カ所（平年0.6頭/4カ所）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、萌芽期から開葉期にかけて防除を実施する。二番茶の萌芽時期に本虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

## ●チャノミドリヒメヨコバイ

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.1頭/4カ所（平年0.2頭/4カ所）と平年並だった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。二番茶の萌芽時期に本虫の発生に注意し、被害が出る前に防除を行う。

## ●カンザワハダニ

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、摘採面での寄生葉率は2.6%（平年2.1%）と平年よりやや多く、裾部での寄生葉率は1.6%（平年2.5%）と平年より少なかった。一方、天敵のカブリダニ類の平均叩き落とし虫数は、0.04頭/4カ所（平年0.12頭/4カ所）と少なかった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。

### 防除対策

- ・例年、5月は天敵のカブリダニ類の増加によりハダニの密度抑制が期待される。一番茶摘採後の残葉でのハダニの密度に注意し、密度が高まる前に早めに防除を実施する。

## ●クワシロカイガラムシ

### 予報の根拠

- ・4月中旬の巡回調査では、平均寄生株率は15.6%（平年6.9%）と平年より多かった。
- ・1か月予報では、降水量は平年より多いが、気温は平年より高いため、発生をやや助長する。



## 防除対策

- ・アメダス気温データを用いた牧之原（菊川市：茶業研究センター）の第1世代幼虫の予想ふ化最盛日は、4月26日現在の計算では5月13日（昨年5月14日、平年5月19日）と昨年より1日早く、平年より早いと予想される。
- ・第1世代の幼虫ふ化時期は、第2世代以降に比べ揃うため防除効果が高い。発生が見られる茶園では幼虫のふ化状況を観察し防除を行う。なお、各地の予想ふ化最盛日と防除適期の目安は、病虫害防除所ホームページで提供している。

## <その他の病害虫>

### ●チャノサビダニ・チャノナガサビダニ

- ・一番茶摘採残葉や摘採が遅くなった一番茶葉に多発することがある。
- ・雨が少なく乾燥条件が続くと、急激に密度が増加する。著しい被害が発生すると、二番茶芽の生育が抑制されることがあるため、発生が見られたら早めに防除する。

### ●チャノホソガ

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除を実施する。なお、成虫の誘殺データについては病虫害防除所ホームページで情報提供している。

### ●炭疽病

- ・3月上中旬の巡回調査では、古葉における平均発病葉数が29.7枚/1.25m<sup>2</sup>（平年15.8枚）と平年より多かった。よって伝染源密度は平年より高いと推測される。
- ・感染は新芽の上位3～5枚目くらいまでの新葉に限られる。また、感染には10時間以上の濡れが必要で、新芽の生育期に降雨が続くと発生が多くなる。このため、天候に注意し、二番茶芽の開葉期に防除を実施する。

### ●もち病

- ・昨年10月の巡回調査では、平均発病葉数6.0枚/1.25m<sup>2</sup>（平年2.9枚）と平年より多かった。よって伝染源密度も高いと推測される。
- ・伝染源となる担子胞子の発芽には高い湿度（99%以上）が必要で、発芽と菌の生育適温は16～20℃である。中山間地ではすでに初発が確認されており、多発すると治療剤（浸透移行剤）でも十分な防除効果が得られなくなるので、茶園をよく観察し、発生初期に防除を徹底する。例年発生がみられる茶園では、二番茶の萌芽～開葉期に予防散布を実施する。なお、耐性菌の発生を防ぐため、DMI剤の連用は避け、予防剤（保護剤）と組み合わせて防除する。

### ●褐色円星病（緑斑症）

- ・4月中旬の巡回調査では、平均発病葉率50.0%（平年41.0%）と平年よりやや多かった。秋冬期の気温が高かったことから、感染、増殖可能な期間が増えたことが要因として考えられる。多発園では新芽の下古葉が落葉しており、落葉すると樹勢が低下することから、減収や品質の低下を招く。
- ・一番茶期には防除手段がなく、薬剤による防除適期は三番茶または秋芽生育期である。そのため、発生状況が最もわかりやすいこの時期に発生茶園を確認しておき、適期になったら防除する。

## 【きく（施設）】

### <その他の病害虫>

#### ●白さび病

- ・多湿で発生が助長されるため、施設内環境に注意する。また、本病の発病適温は17℃前後である。
- ・発生ほ場では、罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

#### ●黒斑・褐斑病

- ・多湿で発生が助長されるため、施設内環境に注意する。また、病原菌の生育適温は黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃である。
- ・本病は潜伏期間が長く、発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。
- ・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

### 3 季節予報

#### ● 1か月予報 (東海地方 令和4年4月21日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 4月23日から5月22日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。
	降水量	降水量は、多い確率50%です。
	日照時間	日照時間は、少ない確率50%です。
1週目	気温	1週目は、高い確率80%です。
2週目	気温	2週目は、高い確率50%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	10	30	60
1か月	降水量	20	30	50
1か月	日照時間	50	30	20
1週目	気温	10	10	80
2週目	気温	20	30	50
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月	:	4月23日(土)～	5月22日(日)
1週目	:	4月23日(土)～	4月29日(金)
2週目	:	4月30日(土)～	5月6日(金)
3～4週目	:	5月7日(土)～	5月20日(金)

#### ※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL <a href="https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html">https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html</a>
--